第四章　數詞

國語の固有の數詞は、「ひとつ」「ふたつ」「みつ」「よつ」「いつつ」「むつ」「なゝつ」「やつ」「こゝのつ」「とを、そ」「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「いそぢ」「むそぢ」「なゝそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」「もゝ、ほ」「ち」「よろづ」で、熟語としては「つ」を伴はずに、「みそ」「いほ」「やほ」「ふたとせ」などとつかふ。

この數詞のうちに、倍加法によつて出來たものゝあることは、荻生徂徠が「南留別志」に、

ふたつは、ひとつの轉ぜるなり。むつはみつの轉ぜるなり。やつは、よつの轉ぜるなり云々

と云つたことに端を發して、早く注意を惹いたが、ガベレンツ(註一)は「いつ」と「とを」との間にも同じ關係のあることを說いてゐる。オストロネジア語族の言語に於て、サモア・マレイ等で lima マラガシーで dimi その他の方言で yima とも sima ともなる五の意味の數詞が、「手」といふと同語であるやうに、數詞の構成が手と關係あることは往々例のあることであるから、わが數詞の倍加構成法を、兩手の指を同數づゝ並べることから來てゐると考へるのも、あながち牽强

とは云はれまい。

「ひと」は「ひた」(直)で、「ふた」はその倍數、「はたち」は又これから出る。「ち」は「箇」で助數詞。「みつ」は充實の義で、「今一つ」といふことか。「よ」は「いよ」「いや」と同義、「や」は「よ」の倍數であるが、もとは澤山といふ意味、「よろづ」はまた之から出る。「づ」は「ち」と同じく助數詞、「ろ」は添加した成分である。それゆゑ孰れも多數といふ意味に過ぎなかつたものが、一は八となり、一は萬といふ義となつたものである。「やそうぢ人」は八十氏人、「やほよろづの神」は八百萬をあてるが、たゞ多數の氏人、多數の神のことで、萬葉集の「鵜をやつかづけ」の如きもたゞ澤山の鵜のことである。それを八の意味に使ふやうになつたのは、佛經に八正道・八寒八熱・八百弟子・八萬由旬など、八もしくはその倍數を用ひる語の多かつたことから來たものであらう。「いつ」の「い」は接頭語で、「つ」は「手」と同語源、片手の指の總數。その母音變化が「とを」で、その間にも倍數關係があると見て誤なからう。「いほ」「いそ」「いか」などを見ると、「い」に五の意味があるやうであるが、これは熟語となつた時、「いつ」の「つ」の省かれたものと見る方がよからう。itu-po, itu-so, itu-ka 等の連結を考へると、省略されたものと見て間違ひない。「ほ」(もとpo)と「も」とは音韻轉換、それを重ねて「もも」といふ。これも「ち」も、

もとたゞ多數を漠然とあらはしたものである。

「なな」(註二)は白鳥庫吉氏の説によれば「並無」で兩手の同數の指を並ぶること能はざること、「この」は「屈無」で兩手の同數の指を屈折すること能はざるか、又は一手の五指を屈し終りて最早この上屈折すべき指なきかを意味すると云はれたが、屈無はよいとして「なな」の「な」に「並」の意味があるかどうか。「な」は「似る」と同語根の動詞に「なす」(「海月なす漂へる時」「眞玉なす吾が思ふ妹」など)のあることから考へると、「似無」ではなからうか。「なむ」「ならぶ」はむしろ「似」から來たものであらう。

「はたち」「よそぢ」「よろづ」等の「ち」「ぢ」「づ」等は、「ひとつ」「ふたつ」等の「つ」と同じく助數詞で、凡てもとは一般の基數詞をあらはしたものである。

みそぢあまり二つのかたち(佛足石歌)

比叡の山をはたちばかりかさねたんらんほどして(伊勢)

こものよそ枝をりびつものよそぢ(源氏若菜上)

なゝそぢのしほにも過ぎ(千載)

などその例であるが、後には「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」等、みな意

味が局限されて人の歳を數へる時にのみ用ひられるやうになり、今はその中の「はたち」だけが殘つてゐるばかりである。その外には「はつか」「みそか」といふやうなものが、日を數へる場合には殘つてゐる。

わが國固有の數詞は、十以上の數を數へる場合になると極めて煩はしく、十一は「とをあまりひとつ」、または「とをまりひとつ」、二十一は「はたちあまりひとつ」又は「はたまりひとつ」といふやうな不便なものであつたから、漢語の數詞が移入されると共に、いつか淘汰されて後には使はれなくなつてしまつた。

「ひとつ」「ふたつ」の「つ」、「よろづ」の「づ」、「みそぢ」の「ぢ」等は皆助數詞であるから、これを除いた形が本來の數詞で、古くはそのまゝ

みたにふたわたらすあぢしきたかひこねの神ぞや(記)

たかさしぬをなゝゆくをとめども(記)

昔なゝの翁の寄りあひつゝ(東關紀行)

ななの寶をやらん方なくてこそおはしますめれ(宇津保)

など單獨につかふこと、「ふたとき」「みつき」「なゝとせ」など熟語のうちにつかふ場合と同じ

であつたのである。

奈良朝時代に助數詞として見えてゐるものは、物の箇數を示す「つ」と「ち」、人の數をあらはす「り」、日數を指す「か」のごときものであつた。

みそぢあまりふたつのかたち(佛足石歌)

夫(セ)なとふたりさ寢てくやしも(萬十四)

えみしを毗儺利(ヒタリ)もゝな人(紀)

近くば今ふつかだみ、遠くあらばなぬかのうちは過ぎめやも(萬十七)

その後、助數詞が漢語でも固有の國語に由つてでも、種々の種類を發達させてゐるのは、支那語の影響と考へるべきものゝやうである。

支那語では、助數詞は同音語の區別に役立つ意味から大いに發達してゐる。Hua は話でもあり畫でもあるが、句を加へて一句話といへば話を意味し、張を加へて一張畫といへば畫を意味することが明瞭になる。國語では助數詞は缺くべからざるものでもないが、漢語が盛んに輸入された結果、支那語の習慣が自ら之に伴つて影響したものであらう。固有の數詞に比べると、漢語數詞は便利である。それ故に固有の數詞は忽ちに驅逐され、漢語數詞が之に代つて大小種

種の數をあらはす爲に、現にわれ〳〵の間に自由に使はれてゐる。

序數詞も固有のものが、「二つめ」「三つめ」など使はれることもあるが、漢語によるものが多數を占め、「番」とか、「號」とか「第」とかいふやうな助數詞によつて現される方が多い。

日本人の意識には、基數と序數とは嚴密に區別されず、基數を現す數詞を以て往々序數を示すに用ひることは、古今を通じて同じである。「ななの朝」といへば正月七日で序數詞であり、「ななのたから」といへば、七種の寶のことで基數詞である。今日に於ても「昭和八年」といへば序數詞であり、「八年かゝる」といへば基數詞であるのと、趣をひとしうしてゐる。

註

（一）Gabelentz, Ueber einen Eigentümlichkeit des japanischen Zahlworts (Z. für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft, 7 Bd)

（二）白鳥庫吉氏、日韓アイヌ三國語の數詞に就いて（史學雜誌明治四十一年）